

〈研究資料〉

社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けた オンライン学習と学生自助グループの支援の試み

榎本 則幸・岡田 哲郎・加藤 慶・藤田 則貴・都築 繁幸

Abstract 通信制大学において国家試験に向けた学生同士の仲間意識を形成していくことは重要な課題である。学生の居住地も全国に分かれており、試験に向けた仲間と共に努力する環境や関係性づくりは、通学制大学の学生と比較すれば弱く、面接授業の機会も限られている。オンライン大学である本学において国家試験対策の一環として自己学習と仲間づくりを融合させながら学生をエンパワメントしていく試みを行った。

キーワード：メタ認知機能、協同学習、SECI モデル、学習の動機づけ

I. はじめに

福祉系大学の社会福祉士・精神保健福祉士の養成校では、資格取得に向けて様々な国家試験対策が工夫されており、1) 受験対策講義を大学内で開講する、2) 受験対策のために教員を非常勤講師として招聘する、3) 授業外で受験対策を実施する、などが行われている。実践等の報告をみてみよう。1) では国家試験の受験対策講座として学科の教育課程に「社会福祉特講Ⅰ～Ⅲ」を科目横断的・総合的な科目として明確に位置付け、知識の伝達に重点を置いた講義形式というよりもグループによる協同学習中心のアクティブラーニング型授業に転換し、知識の定着やグループアプローチを通して必要な能力を向上させたものがある（田幡、2019）。2) と 3) では学習支援と生活支援を両輪として学生のエンパワメントを意識して主に 3 ～4 年生への支援を強化するために 2014 年から「国家試験対策室」を設置し、学部教員 2 名の指揮の下に社会福祉士資格を有する 2 名の非常勤スタッフが業務にあたりながら、授業外に「国家試験対策ゼミ」を開設している報告がある（田中ら、2019）。3) では、学内 SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の運用が試験的に開始されたことをうけ、社会福祉士国家試験対策に SNS を活用している例がある（高木、2009）。

一方、国家試験の学習の基本は、自己学習であり、ここで重要なのは学習方略の修得であるとする（松永、2020）。国家試験の受験を目指す学生の中には、筆記試験を課さない試験により入学している者がおり、試験に向けた学習方法自体が分からず、基礎学力のみならず、国家試験に向けた学習方法を伝え、自己学習ができるように集中力やモチベーションを維持していく支援が必要であるとする。国家試験対策は、学生が主体的に受験に必要な知識を身につけることが前提となるが、この前提の部分に数多くの難問が待ち受けているとする（田中ら、2019）。

これらの報告から通学制の福祉系大学では、授業および授業外に常に共に学ぶ仲間の存在があり、国家試験に対して志を同じくする仲間と共に努力し、学習面で互いの弱点を補強し、精神面では共に励まし合いながら同じ目標に向けて学びを育む環境にあるが、通信制の福祉系大学は、学生同士が一堂に介する機会は限られ、対面による仲間づくりは難しく、社

会福祉士・精神保健福祉士国家試験対策としての仲間づくりを構築していくことが制約されている。また、自己学習そのものを学生に強化していく必要があり、自己学習と仲間づくりの両方を同時に支援していく体制が望まれる。

本稿では、通信制（オンライン）大学において国家試験対策の一環として自己学習と仲間づくりを融合させながら、学生をエンパワメントしていく試みを報告する。【都築繁幸】

II. 支援体制の構想

（1）授業と支援体制の概要

本学は、2018年4月にオンライン完結型大学として開学したばかりであり、国家試験対策は、暗中模索の状況である。人間福祉学部は、社会福祉モデル、精神保健福祉モデル、包括支援モデルからなり、社会福祉モデルと精神保健福祉モデルの学生は、国家試験の指定科目の単位を修得すれば、国家試験の受験資格が取得できる。受験を希望する学生の多くは、4年次の夏頃まで、相談援助の技術の実習・演習を受講しており、本格的な国家試験対策の学習は、夏以降となる。国家試験で求められる知識内容と本学のメディア授業の学習内容は本質的に異なるものではない。しかし、学んだ事柄が自らの知識として定着し、国家試験で確実なスコアを得ていくには、授業外に学習の機会が必要となる。

表1 東京通信大学における4年次の授業と支援体制（2021年度）

授業期間 (映像教材配信/単位認定試験)		1 学期 (4/8～6/12)	2 学期 (7/1～9/4)	3 学期 (9/30～12/4)	4 学期 (12/23～2/26)
授 業	社会福祉モデル	相談援助演習Ⅲ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習	相談援助演習Ⅲ 相談援助実習指導Ⅱ		
	精神保健福祉モデル	精神保健福祉援助演習 精神保健福祉実習指導Ⅱ 精神保健福祉援助実習Ⅱ	精神保健福祉援助演習 精神保健福祉実習指導Ⅱ		
授 業 外	チャレコク～ 国家試験に向けて	(a)国家試験に向けた 心構え (b)過去問チャレンジ (c)出題傾向予測	(a)国家試験に向けた 心構え (b)過去問チャレンジ (c)出題傾向予測	(a) 国家試験に 向けた心構え (d)チャレコクイベ ント	(a)国家試験に向け た心構え (d)チャレコクイ ベント
	国試オンライン学習		①7/5-7/24 ②8/7-8/20 ③9/13-9/22	① 10/16-11/15	
	国試オンライン学習ゼミ		①8/13-8/15 ②9/10-9/11	③10/8-10/9 ④11/12-11/13 ⑤12/10-12/11	⑥1/14-1/15

そこで、1)大学側から受験情報を発信し、学生に受験者としての自覚を喚起させる、2)学生自身に試験問題の解答体験を与え、3)試験日までのモチベーションを維持させる、といっ

た連続性のある支援を構想した。1) の情報発信は、「チャレコク」として 2019 年度から具体化し、2) を「国試オンライン学習」、3) を「国試オンライン学習ゼミ」とした活動を 2021 年度から試みた。表 1 に本学部の 4 年次の授業と授業外の活動を整理した。

(2) 国試オンライン学習

2021 年 7 月より「国試オンライン学習」を開始した。この学習の目的は、国試の過去問を繰り返し、自己学習をすることである。申し込みの際に事前テストを行い、学習終了後には、事後テストを行い、その間の学習の成果を診断でき、事前・事後テストの問題は、第 2 回以降の学習問題として再度、出題されることを謳っている。自己学習の学習問題は、試験問題別（科目別）に配列されている。学習にあたっては、3 回までチャレンジすることができ、学習時間は、1 題を 90 秒で回答するように設定され、3 回の学習を終えた段階で正答が示される。オンライン学習では、解説を設けていない。それは、市販の書籍等を通して自己探求しながら学習を確かなものとするためである。オンライン学習を契機として国試に向けて自分の学習計画により受験の準備をすすめていくことを期待した。対象は、社会福祉モデル及び精神保健福祉モデルの 4 年次の学生で、2022 年 2 月に実施される社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験の受験を希望している者である。学生には、正規カリキュラム外のものであり、任意参加のクラスであること（費用は不要・GPA への影響等もない）、正規の授業の小テストと同様な受験方法で、国家試験の過去問を自己学習する旨をアナウンスした。なお、「チャレコク～国家試験に向けて～（チャレコク通信）」を併用しながら、受験対策を進めることを奨励した。期間は、表 1 のように第 1 回から第 3 回までは 2 週間、第 4 回は 4 週間とした。

(3) 国試オンライン学習ゼミ

相談援助実習・精神保健福祉援助実習は、本来、対面による帰校日指導を行うこととしていたが、新型コロナウイルス感染症対策として毎週土曜日朝 9 時 30 分からオンライン会議システムを活用して指導したところ、学生たちの満足度が非常に高いという結果が得られた。それは実習中にさまざまに不安を抱えている中で同じ仲間と語らいの場を持てるからであった。実習後も学生たちに国家試験の学習としてオンライン上の語らいの経験を継続させることは意欲喚起になると考え、オンライン本学である本学ならではの取り組みとして計画した。

各回の時間は 120 分とし、最初の 30 分程度は教員から話題を投げかけ、残りの 90 分は学生自身の報告・作業・グループでの共有時間とした。平日夜と土曜の午前と午後にオンライン会議システム「Teams」を使用してリアルタイム開催を行った。それぞれのゼミは月 1 回の開催とするが、3 人の教員で開催時間帯をわけ、ゼミ参加の学生の都合を調整した。参加は申込制としたが、当日参加も可能とし、学生がどの回にも自由に参加できるようにした。なお、国試対策問題集などは電子書籍版にて複数購入し、これらを本学の図書館に配架し、学生が必要な時に使用できるように学生への利便性を図った。【都築繁幸】

Ⅲ. 国試オンライン学習の試み

本学部では、8月末まで相談援助実習の事後学習としての面接授業を行っており、多くの学生が9月から国家試験の学習を本格的に開始するものと認識した。国試オンライン学習は、予備的な学習として7月と8月、本格的な学習として9月以降というように2段階とした。社会福祉士国家試験受験希望者は、8月末時点で86名であった。このうち、第1回は、35名が参加し、その後は、19名前後が参加し、参加率は、ほぼ20%であった。精神保健福祉士の場合は、希望者は19名であり、5名が参加し、参加率は26%であった。

表1 社会福祉士

	申込者	事前テスト		事後テスト	
		共通	専門	共通	専門
第1回	35	33	33	12	11
第2回	18	17	17	10	10
第3回	17	17	17	9	8
第4回	19	19			

表2 精神保健福祉士

	申込者	事前テスト		事後テスト	
		共通	専門	共通	専門
第1回	5	5	5	1	2
第2回	4	1	3	0	3
第3回	2	2	2	1	2
第4回	5	5			

現時点で参加者から「国試オンライン学習の期間を長くし、何度でもトライできるようにして、後々まちがった問題を参照可能にして欲しい」、「オンラインの事前テスト期間が短い。各教科の重要点、試験に出る予想箇所、問題の分析などがあればよい」、「解説付きの問題を多く用意して欲しい」、「分からない問題を学生みんなで投稿して考える様なオンライン上の場所があると良い」、「わからない時に気軽に質問できる制度が欲しい」、「国試に向けて、具体的には問題を解いていくしかない」などの意見が寄せられている。【都築繁幸】

Ⅳ. 国試オンライン学習ゼミの試み

国試オンライン学習ゼミは、表1にあるように2021年8月13日から開始し、本学の演習・実習科目の担当教員が輪番制で行っている。ゼミへの参加は、提示された日程から事前に都合の良い日を学生が選択するために参加メンバーは毎回、異なる。ここでは、表1の②と③の時期に行った4つの実践を紹介するが、学生の意見・感想等は、組織的・系統的に調査したものではなく、ゼミが展開される中で学生が陳述したものを整理したものである。教員がどのような考えで進めていったかを中心に述べる。【都築繁幸】

(1) 9月10日(金) 18:00-20:00

参加者は7名であった。内容は、①受験手続前だったために受験の手引きを取り寄せて、対応しているかを確認、②「卒業見込証明書・指定科目履修見込証明書」を大学側に申請しているかを確認、③国家試験出題基準・合格基準の確認、④学習方法の共有(1人ずつ発表し、共有)、⑤メンバー間での情報共有、⑥目標を立て、自分にあったスケジュールおよび計画立案のアドバイス、⑦健康管理と受験対策である。

①②では、受験手続前だったために「社会福祉士」或いは、「精神保健福祉士」国家試験受験希望者に『受験の手引』を取り寄せているかを確認した。全員が取り寄せていた。また、出願時に必要となる「卒業見込証明書・指定科目履修見込証明書」を事前に申請しているか、また、受験手数料を振り込んでいるかどうかなど細かく確認した。受験希望者からは、「皆で確認できたために安心できた。」との声を直接、聞くことができた。通学生の場合は、直接会って確認できるが、本学では、自身で『受験の手引』の取り寄せから手続き、発送までの一連の流れを行うために、その点を共有できたことが安心感に繋がったと思われる。

③では、実際に、「公益財団法人 社会福祉振興・試験センター」にアクセスをし、確認していった。「出題基準」の「大・中・小項目の位置付けと関係」について説明した。

④では、7人のメンバーが、どのような勉強方法で行っているのか、お薦めの勉強方法をメンバー同士で共有した。そうしたことが、一体感に繋がったと思われる。

⑤では、④と重複するが、メンバー間で「不安に思っていること」、「聞きたい事」、「何時間位学習しているのか」などをお互いに情報交換した。

⑥では、試験日の確認と試験日に向け、どのように自身の気持ちを高めていくのかを考えさせた。具体例として、「目標を立て行う」ことや「やることリスト」等を作成し、毎日必ず取り組む教科(受験科目)を設定し、表を作成するなど、可視化することの重要性を伝えた。さらには、スケジュール管理を行うという意味で、試験日から逆算して「受験日まであと〇〇日」等も作成し、自身の気持ちを高めていくことや日単位、週単位、月単位でスケジュールを作成し、「どこまでに何を行うのか」を明確にするようにアドバイスした。

⑦では、「普段から規則正しい生活に心がける事」や「普段から1問約1分半で問題を解くことができるようにする」、社会福祉士の場合、例えば、『共通科目』は、10:00~12:15(午前)、『専門科目』は、13:45~15:30(午後)で行われるが、『共通科目』及び『専門科目』の時間配分も模擬試験を積極的に受験するなど、工夫するように伝えた。

終了後に簡単に意見集約を行った。「みんながどのような勉強法を取り入れて行っているのかが分かった。今回教えて頂いたように週の時間割みたいなものを作って、自分の進捗状況を確認出来るようにしていこうと思った。」、「皆さんの勉強状況を伺い、刺激をいただいた。時事問題も必ず確認しなければならない点を知ることが出来た。頑張らねば、と改めて思った。」、「時事問題に対する情報は有意義だった。」等の意見が出された。【藤田則貴】

(2) 9月11日(土) 10:00-12:00

参加者は6名であり、その内の1名は、アカデミックアドバイザーとして担当している精神保健福祉モデルの学生、もう1名は社会福祉モデルの学生で相談援助実習指導を行った学生であった。他の4名は初対面であり、3名が社会福祉モデル、1名が精神保健福祉モデルであった。第1回目の8月に開催した国試オンライン学習ゼミに参加した者は2名で

あり、4名は初の参加であった。当初、ブレイクアウトルームを使用して少人数での交流を図る予定であったが、6人であったためにグループ分けは行わずに実施した。

内容は、①自己紹介と現況報告、②国試の取り組みについての不安を語ってもらう、③国家試験を理解する、④受験の手引きの確認、⑤今年度の試験委員の確認、⑥出題基準等の確認、⑦過去問を利用した勉強方法であった。

①では、「指定科目を取り忘れていた。」「実習免除者で免除科目も卒業要件単位に含まれていると勘違いしていた。」「3学期、4月期で10単位以上を取得しなければならず、国家試験に集中できない。」「家事や仕事が忙しく勉強の時間をどうやって作りだしたらよいか悩んでいる」など、集中して国家試験学習に臨む環境ではないことが示された。

②では、「模擬試験を受けたが点数が低く自信を無くして合格する気持ちが持てなくなった。」「今から取り組んでも遅く感じてしまい意欲がわからない」など、この時期でモチベーションが低下している傾向が露呈された。

③～⑤では、パワーポイントにより要点を示しながら解説を行った。解説することにより現時点での国試に臨むべき状態像などを伝え、現状において十分に国試に臨める状態像であることを認識させた。ゼミを開始した当初は、国家試験に臨む不安や孤独感が見られたが、交流が進むにつれ、終盤では笑顔も見られ意見交換も活発に行われた。

学生の感想として以下のことが示された。「自分を刺激する機会として参加し、実際に刺激されたのでよかった。先生方や、目標をもっている学生と接することが必要でした」、「2学期の成績発表があるまで、やる気が出ない状態でした。指定科目の教科で、単位取得できても3学期もまだ残っている。もし2学期で単位を落としていたら試験の願書を提出しないこともあり、時間だけが過ぎていました。これではいけない、きっとゼミだったらモチベーション向上できるかもしれないと思い参加した」、「本校では、ほとんどの方が仕事をしながら勉強し、国家試験に向けて頑張っていることが分かった。やはり通信大学であっても先生や皆さんと直接話ができることが、大学で学ぶ醍醐味だと思った」、「他の参加者の方も同じように大変な中頑張っていることがわかった」、「先生のお話からまだまだ頑張られることがわかった。どのように勉強したらよいかがよくわかってよかった。大変励みになった」、「共有の場を設けていただき有難うございます。ゼミは毎回のテーマがあれば教えてください。社福の方と一緒に開催は勉強の仕方等や不安等を共有することでしょうか。共有という意味では数少ないスクーリングですが顔と名前が一致している方との方が有難い」、「PSWの方は皆互いに連絡先をしていますが、その場では聞きづらい事が後で聞けないゼミ限りとなってしまうのが残念である」、「前回のゼミでこの場を利用してお互いに・・・ような話がありましたが、本学のメールでは学生同士でのメールが出来ないと思います」。これらのことからゼミに参加した学生は、不安や孤独感を持っていることや学生間の交流（コミュニティの必要性）を求めていることがわかる。【榎本則幸】

(3) 9月11日(土) 14:00-16:00

参加者は7名であった。少人数のためにグループ分けは行わずに実施した。参加者の内、6名は過去に面接授業（スクーリング）等で担当した学生であり、1名は初対面であった。参加者同士で面識のある学生、お互いに申し合わせて参加したという学生もいたが、同じ目標に向かう仲間との「出会い」の時間として「自己紹介」を設定し、互いに「現在の学習状

況」を報告し合うことにした。内容は、学生が学習の「スタート支援」という意識をもつように、①勉強方法の基本や参考資料の情報を提供する、②ワークシートを基にして参加者間で情報を交換する、という二つの柱立てでゼミを進めた。

①では、パワーポイントによるプレゼンテーション資料により、「公益財団法人社会福祉振興・試験センター」のホームページも参照しながら、試験概要、出題基準・合格基準、過去の試験問題を確認した。特に、科目間の関連性と科目ごとの出題傾向を掴んだ上で効率的に学習を進めていくこと、そして「暗記力」が問われるため、記憶の仕組みも理解して学習を行っていくことを伝えた。また、市販のワークブック等をもとに、各科目の「出題内容の全体把握」、「過去問分析（傾向把握）」、「周辺知識の補充・整理・理解」を循環して行うことが「基本の学習方法」であり、「定番問題をとりこぼさない」ように、自分なりの学習方法を早期に見出す必要性を伝えた。さらに、時事問題や最新の制度改正に関する出題に対応するために参照できる情報源を伝えた。

②では、教員が作成したワークシートを用い、まずは「得意科目」と「苦手科目」、またその「中間にあたる科目」について「現状の点数（見込み）」と「目標とする点数」を整理し、その上で「現状の点数」から「目標とする点数」に近づくための「戦略（学習計画）」を「11月まで」、「12月」、「1月から試験直前」に分けて記載し、さらには共有できる「有益な情報・ノウハウ」について記載させた。そして学生の進行のもとに参加者間で情報交換を行い、適宜、教員がコメントした。

参加者の状況は、「早い時期に学習を始め、模擬試験でも良い成績を得た群」と「まだ本格的に学習を始めておらず、模擬試験の成績も芳しくなかった群」のように二極化していた。後者の学生は前者の学生に刺激を受け、学習を進める動機づけを得た。その一方、前者の学生も「皆さんとの交流で国試に向けて気合いを入れられた」と、モチベーション維持のため本ゼミを活用したようであった。ゼミ終了後の意見集約では、「他の人と話すことでモチベーションアップにつながった」、「自分一人ではないとの安心感が生まれた」「通信制大学という性格上、学生同士のコミュニケーションをとる機会が少ないためこのような集まりはとても良かった」とする、学習の動機づけの観点からゼミの意義を感じたという意見もあった。「皆さんの勉強状況を伺い、刺激をいただきました」、「国家試験をどこから手をつければ良いか、どこに気をつければ良いかなど、有効な情報がたくさんあった」と学習方法を知る観点からも意義を感じたとする意見があった。また、「時事問題も必ず確認しなければならない点を知ることが出来ました」、「隙間時間にラジオのように聴ける youtube コンテンツがある」等、学生間で国家試験に活用できる有益な情報が共有され、情報収集の観点からも当ゼミの意義が見出された。国家試験にまつわる教員自身の経験談や知見が役立ったという声もあった。この点、教員自身の国家試験の受験経験もふまえ、「国家試験までの間は、その学習を何よりも優先させること」、「最後まで決してあきらめず、絶対にこの年に合格する！」という強いモチベーションがなければ結果に結びつかないこと、統計的にも在学中に受験した人の合格率が高いこと等の情報を、実感をもって伝えた。【岡田哲郎】

（4）10月9日（土）14：00－16：00

参加者は9名であった。学生の中には既に面接授業などで面識がある学生もいるが、初対面の学生もいたので自己紹介をしてから開始をした。お互いの国試に向けた勉強の状況

について意見を交換し、模擬試験の結果を踏まえて、さらに勉強を行っていく必要性をお互いに認識した。ブレイクアウトルームの使用を検討していたが、少人数であったため、使用せずに行った。当初はお互いに緊張している場面も見受けられたが、同じ試験に向けて勉強をしている仲間であるという認識がすぐに芽生え、和気あいあいとした雰囲気で行進できた。また、それぞれの学生からは近況報告として、国試対策に関する事柄だけではなく、就職活動として、志望していた社会福祉協議会から内定を得られたことや、大学卒業をしたのちの進路について報告があり、前向きな報告内容に対して、参加者全員から「おめでとうございます」という声をかけあい、国家試験合格に向けての意欲を向上させることができた。

ゼミの内容は大きく次の二つからなる。一つ目は、国試対策に向けての勉強法、二つ目はモチベーション管理についてである。一つめの国家試験対策の勉強法については、まず、国家試験で問われる、著名な歴史上の福祉実践家や学者の名前、それぞれの行ったこと、さらには理解しておくべきことを、どのように自らの中に整理して記憶するか、という点について、具体的なツールを紹介しながら、勉強方法を解説した。そして、社会福祉学を学ぶ学生が、一般的に苦手としがちな社会保障制度の勉強法として、教員自身が過去の受験時に用いた参考書を紹介した。二つ目として、モチベーション管理についてである。勉強方法としても位置付けられるが、社会福祉をテーマとする映画をいくつか紹介し、活用方法について自らの経験を踏まえて説明を行った。より具体的には、映画を見ることを通じて、自らがその物語の中に入り、社会福祉に関する問題意識やモチベーションを維持しつつ、自らがイメージしにくい福祉領域の映画を通じて、その領域に対するイメージを広げることを説明した。社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験では、全ての科目で得点することが求められる。そのために苦手な科目を意図的に無くし、得点できるように自らが詳しく知らない福祉の領域でも手がかりとなるイメージを自分の中で作っておくことにより問題を解く糸口となることを紹介した。

ゼミ実施後の意見集約では、「国試のモチベーションが上がった」、「時事問題の調べ方を教わったこと。皆さんの勉強方法を聴けたこと。先生や皆さんの笑顔に癒され、勉強の意欲も湧きました」、「リラックスして情報交換できました。試験まで3か月ちょっととなり、精神的にも焦りが出ているため励みとなりました」などがあった。他に、教員や学生同士で情報交換できたことを評価する声も多数寄せられた。「様々な方とお会いしお話できたので本当に楽しかったです」、「先生の経験を教えて頂けたことや、仲間と情報交換が出来ました」、「参加者数がちょうど良かった。先生もリアクションがいいし、優しいし、話しやすいのでとても良かった」、「先生や仲間と話し、気持ちの切り替えができた」、「学生の皆さんの現在のご様子を聞く事、また先生のお顔を拝見しながらお話しする事で安心感を得られました」、「皆さんが頑張っているのがよくわかり励まされました」、「情報を共有できた」、「他の学生がどのように受験勉強しているかわかった事、スクーリングで一緒だった他の学生の近況が分かった事、担当教員が自身の実習担当で話やすかった事」など、ゼミに参加することにより勉強のモチベーション向上につながったとする意見が寄せられた。これらの意見から普段、一人で勉強することが多いと考えられる本学の学生たちにとっては、共に学ぶ学生同士が直接、顔をあわせて情報交換することが、経験を分かち合うことにつながり、次の学びのステップに自らを進めていると考えられた。課題として次の二つがあげられた。一つ目は、仕事や家庭をもちながら勉強時間を確保することの困難さ、二つ目は通信制大学にあって

自分のモチベーションをいかに維持するのか、ということであった。自分のモチベーションを維持する方策として、国試対策オンライン学習ゼミに参加することは有効であるという意見が多くを占めていた。【加藤 慶】

V. 総合討議

今回の報告は、オンライン大学である本学において国家試験対策に向け、自己学習と仲間づくりを融合させながら、学生をエンパワメントしていくことを試みた序報である。

福祉系大学の社会福祉士・精神保健福祉士の養成校は、すでに長年の実績があるが、開学4年目の本学部では、残念ながら十分な体制にはなっていない。今回の試みも「仲間づくり」の観点からみれば、現段階で学生自らが「自助グループ」を形成しているとは言い難い。しかしながら、今回の試みを通して、特定の参加者だけが話しをし、他の参加者が阻害されないように、また、学生間の相互理解が不十分で人間関係の問題に発展しないように教員のファシリテーションによってゼミを運営していくことは不可欠な働きかけであり、このような場を通じて徐々に「仲間づくり」が行われ、これを継続していくことが「自助グループ」の形成につながっていくとの感触は得たと言える。今後の展開を考えていくために現時点での課題を討議してみる。【都築繁幸】

(1) 仲間づくりの機会の提供について

オンライン大学として社会福祉士・精神保健福祉士養成課程を設置する人間福祉学部では、国家試験合格率の向上が期待される。そのために学生同士が安心して安全な環境の中で学びについて分かち合うことができる場を提供し、学生自身の国家試験に向けた不安感や孤独感を緩和していくことが求められる。松永（2020）は、国家試験の学習は自己学習が中心であり、学習方略を知らなければ、効果的な国家試験に関する学習はできず、国家試験の学習は、メタ認知を働かせ、自身の学習の調整を自己で行っていく自己調整学習のスキルが必要であり、国家試験対策では、学習の最初の段階で自己調整学習ができるための具体的なスキルを伝えていくことが必要であるとする。田幡（2019）は、社会福祉学科である当学科の学生の3分の1は国家試験を受験しないとし、学生は実習などを通して自らの適性に気づき、自分を活かす別の道を見つけるが、資格取得の希望を持ちながらも、指定科目が多く、受験資格取得が困難になることもあるとする。授業外に開設した社会福祉特講Ⅰ～Ⅲを受験時までには学び続けた学生は、「社会福祉士になりたい」という希望を持ち続けており、こうした学生を増やすための努力が必要だとする。高木（2009）は、学内SNSに参加したのは社会福祉士国家資格の合格を目指す学生たちの10%未満であったが、講義以外の場で情報・意見交換でき、受験生同士が刺激しあう関係ができれば、モチベーションが上がる可能性があり、学内SNSは、情報交換と仲間づくりの場として機能できるとする。

今回の国試オンライン学習の参加率は、国家試験受験希望者の20%～26%程度であったが、こうした活動が学生間で認知され、年度を追うごとにその成果が示されていけば更なる参加が見込まれ、プラスのスパイラルとなろう。今回、学生から寄せられた意見を国試オンライン学習の改善に反映していきたいと考える。【都築繁幸】

(2) 協同学習の意義について

学習におけるグループダイナミックス研究の先駆者であるデービット・ジョンソン (Johnson, D. W.) とロジャー・ジョンソン (Johnson, R. T.) は、学習を他の学生と競争させる「競争」学習、一方向で教員の講義を聴き個人で学ぶ「個人主義的学習」、グループで学び合う「協同学習」に分け、「協同学習においては競争的な学習や個別学習よりも高い成績、協調的な人間関係、より望ましい精神面での適応をもたらす」と結論付けている。また、協同学習の成果を大きく三つに分けて、一つ目は達成への努力、二つ目は協調的対人関係、三つ目は心理的適応であり、この三つは相互に因果関係を持っているとする。達成への努力として、達成のために仲間との意見交換が活発になる、自己の知識や結論を再構築する過程で題材をより深く把握し記憶にとどめる、他の学生の持つ考え方や情報を受け入れ活用する、そして高次の推論能力や批判思考能力を助長することを挙げている。協調的対人関係では、仲間同士互いに好感を抱き仲間の発言に耳を傾けようとする、外部からの非難から仲間を守ろうとする、学習の熟意が強くなる、挫折に絶える力が身に付く、教員に好感を抱く、教員との交流が増えることを挙げ、心理的対応では、情緒的成熟を促し社会的視点を取得できる、自尊感情が伸びると考えている。

このことからオンライン学習ゼミの取り組みは、学生たちが国家試験に向かうためにオンライン上の語らいの経験を継続させることで意欲喚起になり、協同学習の効果による包括的な視点からのサポートを提供することができると考えられる。「国家試験対策は、学生が主体的に受験に必要な知識を身につけることが前提となるが、この目標を達成するには、数多くの難問が待ち受けている (田中ら、2019)」との指摘があるが、このことを克服していく手段の一つとして意義があるものと考えられる。【榎本則幸】

(3) 支援の関連プロセスについて

戸塚 (2018) は、ソーシャルワーク実践力を養成する諸条件を野中(2010)らによる『SECIモデル』を応用して検討している。野中 (2010) らは、暗黙知と形式知の相互作用こそが知識創造の源泉であると考え、4つの変換モードからなる知識創造モデルを提案している。そのプロセスとして第一モードを個人レベルにおける共同化 (Socialization)、第二モードをグループにおける表出化 (Externalization)、第三モードを組織における連結化 (Combination)、第四モードを個人レベルでの内面化 (Internalization) とし、共同化 (S)、表出化 (E)、連結化 (C)、内面化 (I) という四つのモードからなる刺激的な知識創造プロセスを絶え間なく進展していく動的なプロセスを提案している。

今回の学生の感想をこのモデルに適用して考えてみると、共同化 (S) では、「みんながどのような勉強法を取り入れて行っているのかが分かった。」は、『共感によって、気づく』ことによって、「今回教えて頂いたように、週の時間割みたいなものを作って、自分の進捗状況を確認出来るようにしていこうと思った。」として、発見から得られる『自分自身のスケジュールを管理する』という新たな知識の獲得へと繋がっていくと捉えられる。表出化 (E) では、国試オンライン学習ゼミを通じて、受講者が『場を共有する』ことにより、受講者同士がお互いを認め、受け容れあい、国家試験合格への道筋をつけていくプロセスになるのではないかと捉えられる。また、連結化 (C) では、国試オンライン学習ゼミの受講者が、今まで行ってきた「授業」、「国試オンライン学習」、「模擬試験」で蓄えてきた知識を繋ぎ合わ

せ、構造化することによって、受講者一人ひとりが苦手科目や高得点科目等を把握し、それを基に学習を進めていく手掛かりをつかむ場となり得るものと捉えられる。内面化 (I) では、『共有化された知識を再び個人の内に取り込み暗黙知化し、既に蓄積している知識と融合させ、新たな知として、個人のなかに落とし込む局面』でもあるため、「連結化」を経て再び新たな知として個人のなかに蓄積されていく段階になる。今後は、『SECI モデル』をベースにしながら、実践力のあるソーシャルワーク養成の在り方を検証していきたい。【藤田則貴】

(4) 情報共有・交流の場の確保について

教員のメッセージやゼミなどで教員と会える時間は、モチベーションを高める原動力となっている。「可能であれば、問題を解いて、解答解説を受けるというような時間もあれば良い」、「もう少し密に、欲を言えば常時情報交換が出来る場が欲しい」、「専門科目以外にも国試に役立つ科目は多くあるので、この教員のこの授業回はもう一度見た方がいいよ、良い本見つけた、等他の学生に伝えられる場が欲しい」。「教員が国試に向けて薦める書籍を一覧で掲示してもらおうと学生としてはとても助かる」、「授業のように特別講座として試験対策講座という選択科目を作ってもよいのではないかなと思う。(単位認定にならなくても)」、「模擬試験や単位認定テストの結果による成績別のサポート」などの意見が寄せられた。これらの意見から学生同士が普段から、さまざまな学習に関する情報共有や交流する機会を求めていることがうかがえる。本学には、学生同士が交流できる SNS もあるが、お互いに顔の見える関係性となっているとは言い難いために大学が直接的に管理運営し、安心・安全が確保された中で国家試験に関する情報共有・交流の場が確保されていくことが望まれる。

【加藤 慶】

(5) 自助グループの形成に向けて

「学習の動機づけ」、「学習方法を知る」、「情報収集」という観点から、今回のゼミは、学習の「スタート支援」としての効果がある程度、果たせたものと考ええる。その一方、以下の課題が見出された。

一つは、継続した学習の動機づけ支援、学習環境を整える支援である。「新型コロナウイルスの感染拡大の状況下では、学習を行う場所を確保する難しさもある」、「日々の仕事や授業から、国家試験の学習に頭を切り替えることが難しい」という声からも「この場に来れば国家試験の学習に専念できる」という学習環境の整備は、一定程度のニーズがあると考えられる。この点、意見集約の回答にあるように「一緒に勉強できる時間が欲しい。例えば日曜9～12時と区切ってオンラインでつないで、画面は映して音声は切ったままで、質問があればチャットを利用して、顔をあげれば皆が見え、一緒に勉強している感じになる。コロナがなければ学校で、皆で勉強できたのと思う。やはり一人でやっているのは切なく不安になる時がある」という意見は、物理的な場を用意することは難しいかもしれないが、「オンラインの学習室」は一考の余地があるものと思われる。

二つ目は、「知識を獲得する講座」についてである。「今後、どのような受験対策サポートが必要か」を尋ねたところ、国家試験指定科目全科目の講座 (いわゆる「国家試験対策講座」)、あるいは「各科目に特化した勉強の仕方 (1点でも上積みできる対策)」の伝授を求

める声が少なくなかった。今回の「スタート支援」のゼミをふまえ、試験日が近づくにつれて高まるニーズにどのように応えていくかは、今後のゼミを運営する上で欠かせない視点である。そのためには、有料（もしくは無料）の外部講座を案内すること、各担当教員が専門とする科目の「ワンポイント講座」や「近年の法改正・時事問題対策」等を今後のゼミに組み込むことも考えられる。また、「知識の拡充」というニーズから「解説付きの模擬問題」を望む声もあった。現状では、「チャレコク」で過去問題を解説し、市販の問題集や模擬試験解説集を活用することを勧めているが、「試験問題の解答体験」としての「国試オンライン学習」とは別の仕組みを検討する余地があるかもしれない。

三つ目は、「ゼミに参加できない/しない」学生への配慮である。ゼミを企画・開催しても「曜日、時間が合わない事が多い」という声もあり、「ゼミに参加できない学生」への配慮を今後、検討していく必要がある。逆に、自らの意思で「ゼミに参加しない学生」に対し必要以上に参加を強制し、学習へのモチベーションを損ねさせない配慮も必要であろう。いずれにしても、「限りある時間を預かる意識」がゼミの主催者側に求められ、その点においてオンライン会議ツールや機器の不具合等で時間のロスが生まれないような入念な事前準備が必要である。【岡田哲郎】

Ⅶ. おわりに

本学は、開学して4年目であり、国家試験対策は、他の伝統校に比べ、経験の蓄積も少ない。今回、国家試験の受験を希望する社会福祉モデルと精神保健福祉モデルの学生に対して国試オンライン学習と国試オンライン学習ゼミを試みた。学生の参加者数という点から見ると必ずしも盛況とは言えない。今回の試みをメタ認知機能、協同学習、野中(2010)らの『SECIモデル』の視点から検討し、情報共有・交流の場の確保や自助グループの形成について若干の考察を行った。「学習の動機づけ」、「学習方法を知る」、「情報収集」という観点から今回の試みは「スタート支援」として一定の成果を果たしたのではないかと自己評価し、徐々に「仲間づくり」が行われ、これを継続していくことが「自助グループ」の形成につながっていくと推察した。学生の意見聴取をもとに次年度の計画に対して改善を加え、次年度以降も引き続き、検討していきたい。【都築繁幸】

文献

- 1) Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (1991). Active learning: Cooperation in the college classroom, 1/E. 関田一彦（監訳）(2001). 学生参加型の大学授業：協同学習への実践ガイド. 玉川大学出版部 23.53-54.
- 2) 松永 繁 (2020) 社会福祉士及び介護福祉士国家試験における学習支援の検討 敬心・研究ジャーナル 4 (2), 103-107.
- 3) 野中郁次郎、遠山亮子、平田透 (2010) 流れを経営するー持続的イノベーション企業の動態理論 東洋経済新報社 28-42.
- 4) 田幡恵子 (2019) 大学における国家試験対策の教育実践ー社会福祉士国家試験に臨む特別講義の効果と課題ー 鴨台社会福祉学論集 27, 44-54.
- 5) 田中秀和、田中央江(2019) 学生のエンパワメントを意識した国家試験対策の取り組みー立正大学における国家試験対策の取り組みー 立正大学社会福祉研究所年報 21,

137-155.

- 6) 戸塚法子 (2018) 社会福祉援助教育に求められるもの 淑徳大学高等教育研究開発センター年報 5, 19-25.

付記 本研究は、2021 年度東京通信大学共同研究費の助成を受けて行われた活動の一部である（研究課題：社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けたオンライン学生自助グループの形成と支援に関するアクションリサーチ、研究代表者；加藤 慶、分担研究者；岡田哲郎、藤田則貴、榎本則幸、都築繁幸）。本稿の実践例は、実習委員会国試対策チームによる国試オンライン学習ゼミの一部です。本稿の執筆にあたっては、主たる執筆個所を本文中に明記したが、メンバーの 5 人で議論した内容を最終的に都築が整理した。故に、本研究の責任は、5 人のメンバーが共同で負うものである。

本研究を進めるにあたり、国試対策チーム長の松為信雄教授より有益な助言を頂きました。松為信雄教授をはじめ、実習委員会の諸先生方に対して、ここに記して感謝の意を表します。

榎本 則幸（えのもと のりゆき）	東京通信大学	人間福祉学部	助教
岡田 哲郎（おかだ てつろう）	東京通信大学	人間福祉学部	助教
加藤 慶（かとう けい）	東京通信大学	人間福祉学部	助教
藤田 則貴（ふじた のりたか）	東京通信大学	人間福祉学部	助教
都築 繁幸（つづき しげゆき）	東京通信大学	人間福祉学部	教授

